

上より、術中食道内圧測定を施行することにより、各手術操作の確実性を、術中に客観的に評価することが可能であると考えられた。

6. 胃癌手術における超音波検査の意義

新井田正枝（消化器病センター外科）

術前、胃癌症例において描出されたリンパ節を転移陽性とするエコー上の診断基準および腹腔内リンパ節の広範な描出法について検討を行った。超音波検査上、転移陽性リンパ節の基準は①大きさ45mm以上、②形態は球状で厚みを有する、③内部均一な低エコー域を有し境界明瞭なものとした。次に検査法であるが体外超音波検査（以下US）、内視鏡的超音波検査（以下EUS）、術中超音波検査（IOUS）を行った。USではNo. 3, 5, 6, 7, 8, 9, 16LD, EUSではNo. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 10, 11LD, IOUSではNo. 12, 13, 14, 16LDの描出に優れた。3種超音波検査の施行によりNo. 1~16LDの広範な描出が可能であり、転移リンパ節を術前把握することができる。よって手術時、胃癌症例各々の進行度に合った合目的なリンパ節郭清の施行に役立つものと考えられる。

7. EUSによる胃病変の診断

橋本 洋（消化器病センター内科）

超音波内視鏡（EUS）は胃壁断層像を描出することで従来の内視鏡検査で困難であった漿膜側の病変の診断が可能である。今日は壁外圧排性病変とSMTの鑑別、その質的診断および胃悪性病変の壁外浸潤像について検討したので報告する。結果：①壁外圧排性病変とSMTの鑑別は全例可能であった。②壁外病変の質的診断は88%で可能であった。SMTは筋原性腫瘍、迷入膵、脂肪腫、胃嚢胞、胃悪性リンパに鑑別可能であった。しかし筋原性腫瘍の良性悪性鑑別はエコー像そのものからは困難であった。③胃悪性病変のpm・ss, se, siの診断率は65%であった。まとめ：EUSでの誤診の原因は細胞成分の浸潤、遠隔な病変、全体を描出できない巨大な病変であり、これらがEUSの欠点と思われる。しかし消化管壁に沿って断層像を描出することで客観的診断が可能である利点があり今後さらに検討を加えたい。

8. 主膵管閉塞症例の臨床的検討

石黒 久貴（消化器病センター内科）

東京女子医大消化器病センターにて、昭和50年1月より昭和60年12月までに行われたERCPは延べ4,893例であり、主膵管の途切れ症例は295例（6.0%）であり、主膵管閉塞症例は221例（4.5%）であった。221例

のうち、手術による肉眼診断および切除標本、剖検により診断が確認された症例は149例であり、その149例を対象とした。主膵管閉塞症例149例の疾患別内訳は、膵癌111例、慢性膵炎18例、膵嚢胞9例、膵嚢胞腺癌6例、膵嚢胞腺腫2例、悪性ガストリノーマ1例、膵ラ氏島腫瘍は119例であり、82.1%であった。主膵管閉塞の病理学的メカニズムを解明し得た症例は97例であり、腫瘍によるもの8例、線維化によるもの7例、膵石によるもの8例、嚢胞によるもの4例であった。

9. 超音波パルスドプラー法による門脈血流測定の意義

大谷 智子（消化器病センター内科）

肝疾患の病態把握を目的として、超音波パルスドプラー法にて肝門脈前区域枝、左枝、本幹における血流測定を行った。慢性膵炎では正常群に比べ、いずれの場所においても血流量増加が認められた。肝硬変では、左枝の血流量増加が認められた。

また、非癌肝の状態把握を目的として、肝動脈塞栓術（以下TAE）を施行した肝癌例の治療前後における経日的門脈血流変化を測定した。ゼラチンスポンジを用いた場合、塞栓した区域枝では平均流速、血流量とも増加が認められた。この増加はTAE後1~2日で最高値を示すが、2~3週後にはTAE前値に復する傾向が認められた。一方、塞栓を行わなかった区域およびリピオドールによるTAEでは、変化が認められなかった。

10. 自己免疫性肝炎における免疫異常の解析—Leu-3a⁺8⁺, Suppressor inducer細胞の選択的欠損—

加藤多津子（消化器病センター内科）

自己免疫性肝炎（ACAH）は、高免疫グロブリン血症や各種自己抗体産生を伴う慢性肝疾患であるが、その免疫異常の解析を行う目的で末梢血T細胞を解析した。既にACAHではresponding T細胞の異常によりautologous mixed lymphocyte reactionが低下していることが報告されている。今回はさらに末血リンパ球の亜集団の数量的変化を検討した。各種モノクローナル抗体を用いてリンパ球の二重染色を行った結果、ACAH群では正常群に比しLeu-3a⁺8⁺細胞群が比率でも絶対数でも減少しており、しかもその減少程度が肝炎の活動性と相関しているらしいことがわかった。以上よりACAHではsuppressor inducer T細胞の減少と機能異常が何らかの免疫異常をひき起こすのみならず、肝細胞傷害とも関連している可能性が示唆